

## 第14章：アメリカ人は過去をどのように用いて考えるのか 歴史教育のための全国調査からの示唆

How Americans Use and Think about the Past

*Implications from a National Survey for the Teaching of History*

担当：鈞悠介（広島大学大学院教育学研究科）

### ■著者情報

著者名：Roy Rosenzweig

研究関心：アメリカ史、労働者階級の文化、デジタルメディア

経歴：1978年にハーバード大学の歴史学のPh.D.を取得。1981年からジョージメイソン大学で歴史学を教え、1994年に同大学のCenter for History and New Mediaを立ち上げた。同センターでは、高校生や大学生を対象としたオンライン歴史プロジェクトや、9.11のデジタルアーカイブのプロジェクトがなされている。



(画像引用元：<https://thewayofimprovement.com/2011/04/27/roy-rosenzweig-center-for-history-and-new-media/>)

### ■重要な用語

- ・ historical consciousness: 歴史意識
- ・ intimate uses of the past: 過去の身近な利用
- ・ collective narrative : 集団的(集会的)な語り
- ・ ”usable past”: 利用可能な過去

### ■議題

- ・ 論文中で示されたデータの多くは、日本の事例とどこが共通していそうで、どこが対照的か（他の研究、もしくは個人的な感覚や経験に基づき。例えば、表 14.2 の「家族で集まる」「学校で学ぶ」こと、表 14.5 の「高校歴史教師」、表 14.6 の「学校」の数値について）
- ・ 本章で取り上げられている Rosenzweig による研究は、同時期の Barton & Levstik(1998),や Epstein(1998, 2000)による発見と半分は合致し、半分は矛盾している<sup>1</sup>。

---

・ <sup>1</sup> Barton, K. C. & Levstik, L. S. (1998). “It wasn’t a good part of history’: National identity and students’ explanations of historical significance. *Teachers College Record*, 99, 478-513.

→他者の研究を交えた考察を上手くする方法は？

**概要：**

電話での聞き取りによる大規模調査をもとに、Rosenzweig は、（一般に危惧されていることとは逆に）アメリカの人々が歴史に普段から様々な形で接していることを明らかにしている。また、人々が重要だと感じる歴史が家族の歴史であることや、歴史を学ぶプロセスに人々が楽しみを見出していることを発見し、保守派が提唱するような従来の歴史教育ではなく、身近な歴史を取り上げつつそれを複雑化させる歴史教育を提唱する。

※以降の節タイトルは鉦が便宜上作成したものです

**■歴史に関する無関心と無知について広く共有される不安感 (p.262-p.264 1.3)**

- 保守系も左派系の危惧：人々や学生が過去を記憶したり関わりを持ったりしない。大学・高校・博物館などの歴史の専門家の間でも主流な言説。  
(それにもかかわらず)
- アメリカ人が実際何を知っていて考えているのかについてほとんど調査されてきていない。  
→1994年、Dave Thelen と Roy Rosenzweig が、インディアナ大学の協力の元、808人のアメリカ人に対して電話調査をおこなった。

**■身近な過去とその身近な利用 (p.264 1.4 – p. 268 1. 10)**

- アメリカ人の多くは過去と関わりを持っていた。(p.265 表 14.1 参照)
  - ・強いつながりを感じる：家族と集まる、博物館に行く、祝日を祝うとき。
  - ・つながりを感じない：本、映画、授業(p.265 表 14.2 参照)
- また、多くの人々にとって「個人的な」過去と「ナショナルな」過去の境界線がぼやけており、ナショナルな出来事が個人的な物語の背景として組み込まれていた。
- どの過去が最も重要かとたずねたとき、年齢や人種などにかかわらずどのグループも家族の過去が最も重要だと答えていた。(p.267 表 14.3 参照)
- どのように過去を用いるかという観点では、現在を生きるために過去を振り返るというこ

- 
- Epstein, T. (1998). Deconstructing differences in African-American and European-American adolescents' perspectives on U.S. history. *Curriculum Inquiry*, 28, 397-423.
  - Epstein, T. (2000). Adolescents' perspectives on racial diversity in U.S. history: Case studies from an urban classroom. *American Educational Research Journal*, 37, 185-214.

とをしていた。

- 過去の「身近な」利用：過去を通して、「私たちはどこからきてどこに向かうのか」「彼らは誰でどのように記憶されたいと考えているのか」などの根本的な問いに答えるために過去を用いていた。こうした問いは、年齢・収入・人種といったものにかかわらずみられた。
- ジェンダーと教育については幾分か影響が見られたが、程度問題であり、概して上述の傾向があった。

### ■どの過去が重要か (p.268 l. 11 – p. 272 l.12)

- 集団間で最大の違いが現れたのが、最も重要だと考える歴史の領域である。(p.237 表 14.3 p.269 表 14.4 参照)
  - 73%の女性が家族の歴史を最も重要だと答えた(男性 58%)。また、黒人のアメリカ人が人種・民族的な歴史を最も重要だとした割合は白人のその6倍であり、オグララ・スー族は10倍であった。
  - より興味深い違いは、自分の家族の過去への言及の仕方
    - ・白人：“we”や“our”
    - ・アフリカ系アメリカ人：“our race, our people”
    - ・オグララ・スー族：“our history” “our heritage” “our culture”, “our tribe”, “our tribe”, “our language”や “our traditions”
- 集団としてのアイデンティティと過去の独特な理解が相補的な関係にある。スー族やアフリカ系アメリカ人は独特の歴史の語りを、博物館や訪れたり祝日を祝うことで形成していた。
- しかし、最もはっきりしていたのは、インタビュー中に現れていた語りの構造であった。黒人のアメリカ人は進歩の物語を構築していたことだった（公民権運動の語りでもよく見られた）。
  - 過去についての集団的な語りの構築と、集団的な語りを素材として現在を理解することが、アフリカ系アメリカ人とスー族には明白であった。対して大部分の白人のアメリカ人にとって 使える過去“usable past”は家族の歴史であった。もしくは国家の歴史を用いてアイデンティティや道徳性や死のようなより個人的な問いに答えるように用いていた。
  - また大文字の History と結び付けられるような、従来の教科書的な直線的な進歩の語りは多く聞かれなかった。ナショナルな出来事は個人的な語りの一部に組み込まれる。もしくはそれがより広い語りに結びつかない形で語られるなどした。(皮肉にも、スー族とアフリカ系アメリカ人の間では進歩的な語りが生きていた)

- 一方で、白人のアメリカ人にとって従来の教科書的な語りは魅力を失っている。  
Rosenzweig はこれを学校カリキュラムの変化ではなく、ベトナム戦争やグローバル化をきっかけにした伝統的ナショナリズムへの懐疑心と見ている。

### ■歴史教育に向けた示唆 (pp.272 1.12-)

- 人々は歴史とつながっていたが、唯一学校教育の歴史と大部分の人々はつながりを感じていなかった。
- 学校教育の「つまらない」などのネガティブな評価が教員にまで適用されているとは限らなかった。過去についての情報の信頼性については、教員は本や映画よりも信頼されていた (p.273 表 14.5 参照)
  - ・ 教員が信頼される理由：家族同様、その当時生きていたから。誠実な人々だから。生徒の成長に専心しているから。
- 一方で歴史授業は、自分たちとの関連性のない名前や日付や詳細の記憶として語られた。これは世代を超えて見られた (p.275 表 14.6 参照)。
- 概して、人々は学校歴史に欠陥を見つけており、(歴史戦争が議論しているような)過去の内容よりも過去についての経験や取り組むプロセスに興味を持っており、自身の歴史を作ることを好んでいた。
- 悲観的な歴史を教えられているからアメリカ人が歴史と関わっていないという保守派の主張と異なり、アメリカ人はすでに過去に十分に関わっている。
  - ↑学校の歴史を好んでいないためである。
  - ↑それも歴史が悲観的になったからではなく、「本物」に触れさせたり現在との関わりに触れさせずに、事実の暗唱をさせているからである。
- インターネットは人々が賞賛する歴史の教え方に適している。
  - ・ 一次資料に触れさせる、歴史家の仕事をモデルにする、生徒の作品のアーカイブ
- 創造的な教師の取り組み↔伝統的なカリキュラムの支持者による攻撃
- 学校の歴史がローカルで私的なものであるべきだというわけではない
  - 身近な過去による制約：人々間の境界を強化し、変化に抵抗する
  - 身近な過去を学習することに可能性はあるが、白人のアメリカ人がそうすることで家族よりも広いつながりを認識することが少ない。

→ここにおいて歴史教師の役割がある。教師は過去の一般的な用い方を、文脈や比較を提供したり、構造的な説明を与えたり、様々な声や経験を導入することで、より豊かにすることができる。(参考：第 15 章の、子供と教師と教師教育者を対象とした調査：先入観に立ち向かう歴史教育の可能性を示唆)

- 従来の国民国家の語りは魅力を失っている。他方で、全ての人々が過去と幅広く取り組んでいる。さらに、その興味は骨董趣味とは程遠い。インタビューからは、最も力強い過去の意味は過去と現在の対話から、現在の関係やアイデンティティや道徳性や主体といった差し迫った問いに答えるために過去を使う中で生まれている。日常生活に見られる過去との繋がり（そして過去と現在の間のつながり）は、授業に必ず導入されるべきものである。